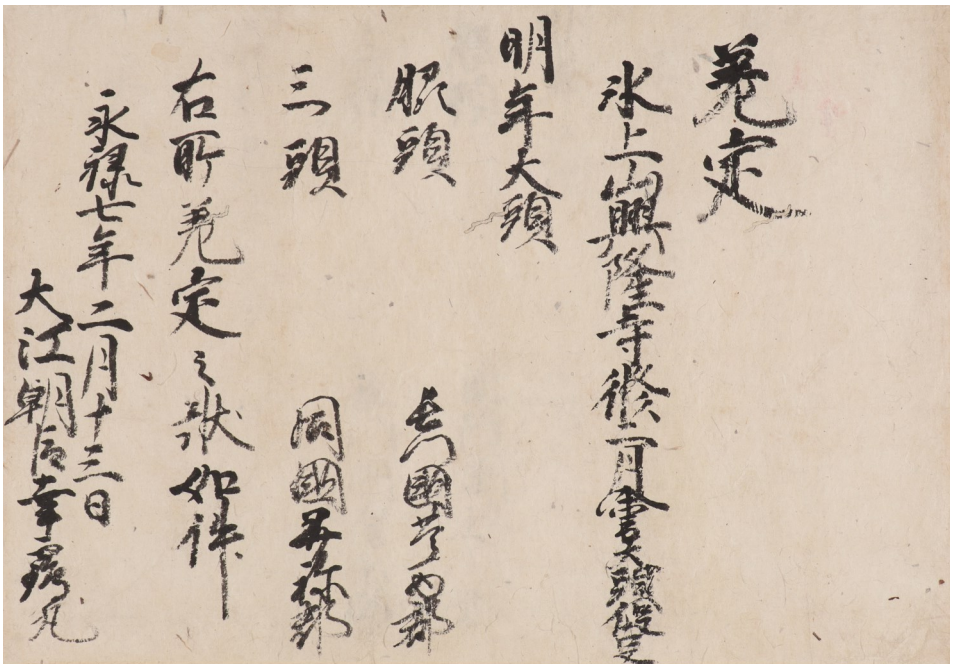
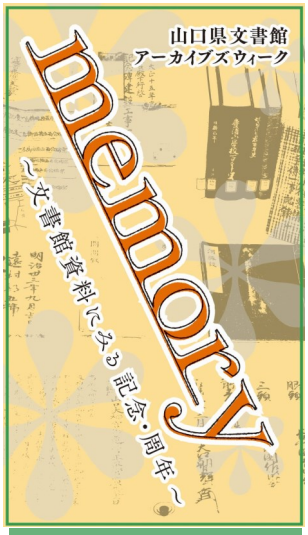




1

毛利幸鶴丸（輝元）二月会頭役差定 （興隆寺文書15-9）

あれから ❶

毛利輝元　没後400年

《毛利輝元》

山口県の歴史に深くかかわる毛利輝元は、寛永2年(1625)にその生涯を終えました。今年、令和7年(2025)は、輝元が亡くなって400年を迎えます。

輝元は天文22年(1553)、毛利隆元の嫡男として生まれました。母は尾崎局(内藤興盛娘・大内義隆養女)、祖父は毛利元就です。幼名は幸鶴丸。

輝元が生まれる2年前、西国社会に権勢を誇った大内義隆が家臣の陶隆房(後の晴賢)らのクーデターにより自刃に追い込まれるという事件が起きました。しかし、大名家としての大内氏は大内義長(大友晴英)を新たな主君として存続していました。

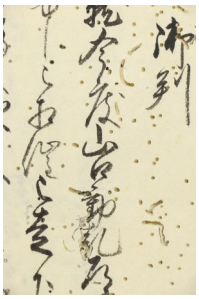
《幸鶴丸、政治の舞台に》

弘治3年(1557)、大内氏を滅ぼした毛利氏は大内氏旧領を掌中に収めました。しかし、急拡大した毛利氏領国には数々の課題があり、そのなかには周辺勢力とのせめぎ合いがありました。

まず毛利氏が矛先を向けたのは山陰方面でした。毛利氏は永禄2年(1559)に備中国(現岡山県西部)・石見国(現島根県西部)計略に着手し、尼子氏と争いました。続けて翌年には、毛利氏は豊前国の門司城(現北九州市)をめぐり大友氏と交戦することになります。

隆元は元就とともに山陰方面での戦いに明け暮れますが、永禄6年8月4日、安芸国(現広島県)にて急死します。この時、輝元は幼名の幸鶴丸を名乗り、元服前ではありましたが、隆元の没後に毛利氏の当主となりました。ただし、輝元が幼少のため実質的当主は元就でした。

とはいえ、幼き輝元にも文書を発給する機会はありました。上に掲げている差定状は、氷上山興隆寺(現山口市大内氷上)で開催される修二月会(しゅにがつえ)に際しての翌年の役(頭役・脇頭役・三頭役)を決定・通知する文書のことです。これには花押が据えられていませんが、署名に輝元の幼名「大江朝臣幸鶴(鶴)丸」とあります。



「山口動乱」
閥閲録差出原本
楊井作兵衛
(57御什書3-6(758))

「山口動乱」は、豊後国大友氏の支援を得た大内輝弘が大内氏の再興を目指して山口入りしたことを指します。

この動乱は長期化しませんでしたが、大内氏時代を知らない輝元に、改めて大内氏という存在を刻み込むには十分な出来事であったといえるでしょう。

文書の日付は、永禄7年2月13日ですので、隆元が亡くなって約6か月後にあたります。この時、輝元はわずかに12歳でした。

《輝弘と輝元》

永禄8年に元服して幸鶴丸から名を改めた輝元は、山陰の尼子氏攻めに加わることとなり、翌年に尼子氏は毛利氏に降伏しました。

永禄11年には、吉川元春と小早川隆景が伊予国(現愛媛県)の河野氏支援に向かいますが、同年中に安芸国に帰国。大友氏とは永禄6年に和睦した毛利氏でしたが、再び北部九州へ遠征します。

永禄12年6月、毛利氏は北部九州遠征を開始しましたが、出雲国(現島根県東部)では尼子勝久が挙兵し、それからわずか4か月後、豊後国(現大分県)に身を置く大内輝弘(父は高弘、祖父は政弘)が大友氏の支援を得て周防国吉敷郡秋穂浦(現山口市秋穂)に上陸し、大内氏の再興を目指しました。

この輝弘の山口入りは、資料上「山口動乱」とされ、行軍の途上の寺社はずいぶん焼失しました。それとともに、寺社に残されていた種々の文化財も失われました。この寺社焼き討ちは、毛利派に属す勢力への攻撃であったのか、それともかく乱が目的であったのか、はっきりしませんが、その後輝弘勢は、「築山」(現山口市内)に陣を置き、かつては大内氏の山城であった高嶺城への攻撃を開始しました。

輝弘の山口入りの報に接した毛利氏は筑前国立花城(現福岡市東区・糟屋郡新宮町・久山町)を攻撃中でしたが、吉川元春と小早川隆景らを山口に急行させました。毛利勢が山口集結の動きをみせるなか、輝弘は高嶺城の攻略に苦戦し、ついにこれを落せませんでした。攻略を断念した輝弘は撤退を開始しますが、豊後国へ戻る手立てを失い、10月25日、周防国佐波郡富海(現防府市)で自刃しました。

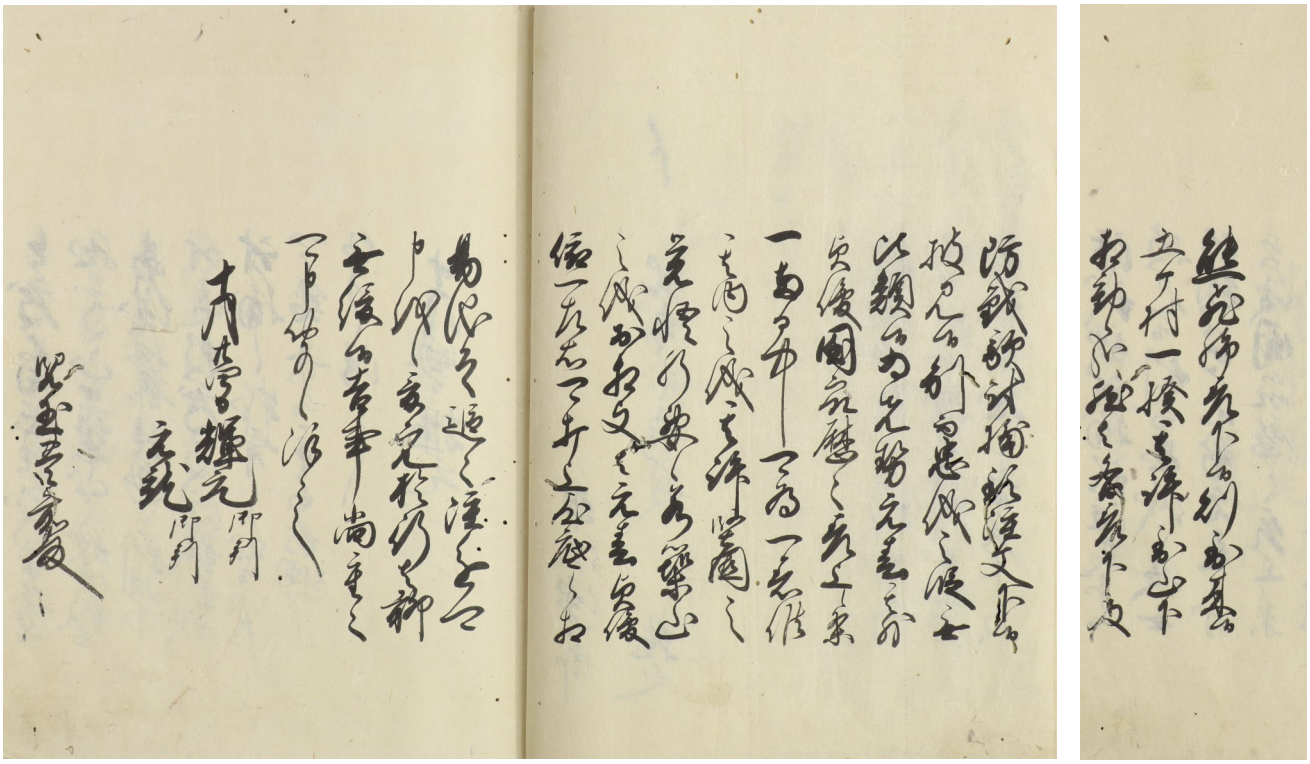
大内氏の再興を望む輝弘と、毛利氏の隆盛を願う輝元の命運はまさに相反する結果で幕を閉じました。しかし、毛利氏はこの動乱を契機に北部九州支配を断念しました。

《毛利氏当主輝元の始まり》

北部九州支配を諦めたものの、関門海峡防衛の門司城を確保した毛利氏は、山陰の尼子氏との戦いに力を注ぎます。そのようななか、隆元の没後から輝元を支え続けた元就が元亀2年(1571)に亡くなり、同年には輝元の姉・津和野局、翌年には母・尾崎局も相次いで没しました。

一方その頃、中央政界では織田信長が勢いを増し、その影響は中国地方にも及ぼうとしていました。

輝元は戦国時代の終焉、江戸時代という新時代の到来を当事者として経験します。時代のうねりに毛利の家が飲み込まれてしまわないよう、輝元の手腕はここから試されることになるのです。



毛利元就・同輝元連署書状写「閥閲録　巻19　児玉四郎兵衛」(県庁伝来旧藩記録　閥閲録38)